

Nara Women's University Digital Information Repository

Title	【内容の要旨及び審査の結果の要旨】定時制・通信制高校に通う不登校経験者への支援に関する研究
Author(s)	金子, 恵美子
Citation	奈良女子大学博士論文, 博士（学術）, 博課 甲第635号, 平成30年3月23日学位授与
Issue Date	2018-03-23
Description	博士論文本文はやむを得ない事由により非公開。 【博士論文本文の要約】 http://hdl.handle.net/10935/4713
URL	http://hdl.handle.net/10935/4712
Textversion	none

This document is downloaded at: 2018-07-14T13:38:49Z

(別紙1)

論文の内容の要旨

氏 名	金子 恵美子		
論文題目	(外国語の場合は、日本語で訳文を()を付して記入すること。) 定時制・通信制高校に通う不登校経験者への支援に関する研究		
審査委員	区 分	職 名	氏 名
	委員長		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
内 容 の 要 旨			
<p>近年、不登校に対して様々な対策や支援が行われてきた。しかし、不登校数は減少することなく高止まりの状態にあり、不登校は依然として重要な教育問題である。小中学校での不登校経験者から多く挙げられるのが高校進学への不安である。不登校生の中には、学力や生活リズム等の問題から全日制高校への進学に不安を感じ、定時制高校や通信制高校を選択する者も多い。定時制・通信制高校は、近年は多様なニーズを持つ生徒を受け入れる場として注目され、不登校生徒の進学先としても定着している。しかし、義務教育後の不登校経験者の高校及び社会での適応については十分検討されているとはいえず、不登校問題対策として中学卒業後の課題に言及されることは増えているが、高校における支援の検討は十分とはいえない。不登校支援の最終目標は「社会的自立」(森田, 2003)であり、社会適応までを視野に入れ検討を行うことが必要である。本論文の目的は、定時制・通信制高校に通う不登校経験者の高校及び卒業後の適応と、高校の学校要因や生徒の個人要因との関連を明らかにすることである。</p> <p>第Ⅰ部第1章では、不登校の現状、不登校に関連する学校要因や個人要因、不登校への支援と予後、定時制・通信制高校の支援について展望し、定時制・通信制高校における不登校経験者の適応と支援について検討することの意味を論じた。</p> <p>第Ⅱ部の各章では、夜間定時制、昼間定時制・単位制、通信制高校に通う生徒、卒業生を対象に調査を行い、不登校経験者のその後の適応について実証的研究を行った。</p> <p>第2章「不登校経験と高校における適応」では、不登校経験者の定時制・通信制高校における適応状況を検討した。研究2-1では、不登校経験者であっても定時制・通信制高校では行動面(登校状況)、心理面(学校生活適応感、自己受容)ともに適応的に過ごしており、中退意識も強くなかった。研究2-2では、登校は良好でも“いつ不登校に戻るかわからない”と感じている者も少なくないことが見出された。これらの生徒のデータからは、学校からの支援も十分に受け止められない可能性が示唆され、行動面・意識面の両面について不登校からの回復を目指すことの必要性が論じられた。さらに、不登校からの回復において、とくに高卒時の進路選択が重要な転換点となることが明らかになった。</p>			

第3章「高校の学校要因とその後の適応との関連」では、定時制・通信制高校の学校要因と適応との関連を検討した。全日制高校との比較から、教師の支援・対応の充実、自由さが定時制高校の学校環境の特徴として見出された。不登校経験者が学校を楽しんでいることには、教師の支援・対応の充実、行事・クラブ活動での充実感、友人関係の良好さ、学習に熱心な雰囲気が関連していた。また、不登校経験者の入学当初の学校適応感の違いにより求める援助には違いがあり、適応感が低い生徒には、学習から生活リズムへの支援まで、学校生活を継続するための具体的支援が重要であることがわかった。

第4章「生徒の個人要因とその後の適応との関連」では、生徒の個人要因と適応との関連を検討した。研究4-1では、不登校事例によく見られる性格特性「内向性」「甘え・耐性欠如」と高校での適応との関連が見出された。さらに研究4-2では、コミュニケーション・スキルの高低と高校での適応との関連が明らかになった。研究4-3では、入学前の親子関係と将来展望との関連から不登校時の親子関係の悪化を防ぐ保護者支援の重要性を論じた。研究4-4では、高校でもいつ不登校に戻るかわからないと感じている者に、不登校期間が4年以上と長い者、不登校時に心身症状が見られた者が多いことが明らかになった。

第5章「不登校経験と高校卒業後の適応」では、不登校からの回復の最終目標である「社会的自立」の観点から高校卒業後の適応について検討した。不登校経験の有無と高校卒業後の心理的適応（自己受容、健康度）に関連はなく、不登校経験者の適応は高校での経験の積み重ねにより回復しうること、高校卒業数年後の就学・就労状況には高校卒業時の進路選択が重要な意味を持ち、高校での進路支援が重要であることが明らかになった。

第6章「不登校経験を巡る心理的変容」では、不登校経験ある高校生の手記をもとに、不登校経験時から高校在学中の現在にかけての心理的変容過程を明らかにした。調査対象者を「自己肯定群」「自己否定群」の2群に分け、自由記述内容を修正版グランデッド・セオリー・アプローチによって分析した。高校において自己肯定的な者は不登校時に周囲からの支援を受けて自尊感情を回復し、“前向き思考”で高校での経験もポジティブに受け止めてさらに自尊感情を高めているが、自己否定的な者は不登校時に孤立しており、不登校によって低下した自尊感情を回復できないまま“複雑な負の感情”を現在も持ち続け、登校は継続しているもののネガティブであることが明らかになった。

第7章では、本論文の総括と意義について述べ、今後の課題を提示して結語とした。

本論文の内容は、査読付き学会誌（「生徒指導学研究」「心理臨床学研究」「学校教育相談研究」）、および紀要（「お茶の水女子大学21世紀COEプログラム平成15年度公募研究成果論文集」「奈良女子大学心理臨床研究」「埼玉純真短期大学研究論文集」）に掲載、掲載予定の9編の論文をもとにしたものである。

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏 名	金子 恵美子		
論文題目	(外国語の場合は、日本語で訳文を()を付して記入すること。) 定時制・通信制高校に通う不登校経験者への支援に関する研究		
審査委員	区分	職 名	氏 名
	委員長		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
要 旨			
<p>(以下、論文内容の要旨より)</p> <p>近年、不登校に対して様々な対策や支援が行われてきた。しかし、不登校数は減少することなく高止まりの状態にあり、不登校は依然として重要な教育問題である。小中学校での不登校経験者から多く挙げられるのが高校進学への不安である。不登校生の中には、学力や生活リズム等の問題から全日制高校への進学に不安を感じ、定時制高校や通信制高校を選択する者も多い。定時制・通信制高校は、近年は多様なニーズを持つ生徒を受け入れる場として注目され、不登校生徒の進学先としても定着している。しかし、義務教育後の不登校経験者の高校及び社会での適応については十分検討されているとはいえず、不登校問題対策として中学卒業後の課題に言及されることは増えているが、高校における支援の検討は十分とはいえない。不登校支援の最終目標は「社会的自立」(森田, 2003)であり、社会適応までを視野に入れ検討を行うことが必要である。本論文の目的は、定時制・通信制高校に通う不登校経験者の高校及び卒業後の適応と、高校の学校要因や生徒の個人要因との関連を明らかにすることである。</p> <p>第Ⅰ部第1章では、不登校の現状、不登校に関連する学校要因や個人要因、不登校への支援と予後、定時制・通信制高校の支援について展望し、定時制・通信制高校における不登校経験者の適応と支援について検討することの意味を論じた。</p> <p>第Ⅱ部の各章では、夜間定時制、昼間定時制・単位制、通信制高校に通う生徒、卒業生を対象に調査を行い、不登校経験者のその後の適応について実証的研究を行った。</p> <p>第2章「不登校経験と高校における適応」では、不登校経験者の定時制・通信制高校における適応状況を検討した。研究2-1では、不登校経験者であっても定時制・通信制高校では行動面(登校状況)、心理面(学校生活適応感、自己受容)ともに適応的に過ごしており、中退意識も強くないことがわかった。研究2-2では、登校は良好でも“いつ不登校に戻るかわからない”と感じている者も少なくないことが見出された。これらの生徒のデータより、学校からの支援も十分に受け止められない可能性が示唆され、行動面・意識面の両面について不登校からの回復を目指すことの必要性が論じられた。さらに、不登校からの回復において、とくに高卒時の進路選択が重要な転換点となることが明らかになった。</p>			

第3章「高校の学校要因とその後の適応との関連」では、定時制・通信制高校の学校要因と適応との関連を検討した。全日制高校との比較から、教師の支援・対応の充実、自由さが定時制高校の学校環境の特徴として見出された。不登校経験者が学校を楽しんでいることには、教師の支援・対応の充実、行事・クラブ活動での充実感、友人関係の良好さ、学習に熱心な雰囲気が関連していた。また、不登校経験者の入学当初の学校適応感の違いに応じて求める援助には違いがあり、適応感が低い生徒には、学習から生活リズムへの支援まで、学校生活を継続するための具体的支援が重要であることがわかった。

第4章「生徒の個人要因とその後の適応との関連」では、生徒の個人要因と適応との関連を検討した。研究4-1では、不登校事例によく見られる性格特性「内向性」「甘え・耐性欠如」と高校での適応との関連が見出された。さらに研究4-2では、コミュニケーション・スキルの高低と高校での適応との関連が明らかになった。研究4-3では、入学前の親子関係と将来展望との関連から不登校時の親子関係の悪化を防ぐ保護者支援の重要性を論じた。研究4-4では、高校でもいつ不登校に戻るかわからないと感じている者に、不登校期間が4年以上と長い者や、不登校時に心身症状が見られた者が多いことが明らかになった。

第5章「不登校経験と高校卒業後の適応」では、不登校からの回復の最終目標である「社会的自立」の観点から高校卒業後の適応について検討した。不登校経験の有無と高校卒業後の心理的適応（自己受容、健康度）に関連はなく、不登校経験者の適応は高校での経験の積み重ねにより回復しうること、高校卒業数年後の就学・就労状況には高校卒業時の進路選択が重要な意味を持ち、高校での進路支援が重要であることが明らかになった。

第6章「不登校経験を巡る心理的変容」では、不登校経験ある高校生の手記をもとに、不登校経験時から高校在学中の現在にかけての心理的変容過程を明らかにした。調査対象者を「自己肯定群」「自己否定群」の2群に分け、自由記述内容を修正版グランデッド・セオリー・アプローチによって分析した。高校において自己肯定的な者は、不登校時に周囲からの支援を受けて自尊感情を回復し、“前向き思考”で高校での経験もポジティブに受け止めてさらに自尊感情を高めているが、自己否定的な者は不登校時に孤立しており、不登校によって低下した自尊感情を回復できないまま“複雑な負の感情”を現在も持ち続け、登校は継続しているものの安定しないことが明らかになった。

第7章では、本論文の総括と意義について述べ、今後の課題を提示した。

以上、本研究では、不登校経験者の適応について、これまでに十分に検討されていない定時制・通信制高校に在学する生徒を対象に、数多くの調査を重ね詳細に検討した。それに加えて、調査が難しい卒業生300名以上を対象とした検討から、不登校経験者のその後を明らかにし、高校における不登校支援を考える上で非常に重要な結果が得られた。また127名の不登校経験者の自由記述から、不登校経験者の心理的変容のプロセスを詳細に明らかにし、不登校児童生徒への具体的な支援を考えていくために重要な視点を提起した。

なお本論文の内容は、査読付き学会誌（「生徒指導学研究」「心理臨床学研究」「学校教育相談研究」）、および紀要（「お茶の水女子大学21世紀COEプログラム平成15年度公募研究成果論文集」「奈良女子大学心理臨床研究」「埼玉純真短期大学研究論文集」）に掲載（掲載予定2編を含む）の9編にまとめられている。

よって、本学位申請論文は、奈良女子大学博士（学術）の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断しました。